

あの日あの頃 - 5

創立のころ

横尾千畝

私が、教師として、目黒星美学園小学校に奉職をしてから、間もなく三十年になるうとしています。その間に、男の子の学級担任を二十一年、理科の専科として七年間を務めることができました。

今、その過去を振り返って見ると、たくさん子どもたちに出会い、共に教えたり教えられたりした思い出があまりにも多く、いざ文章に書くとなると、何を書いたらよいのやら迷ってしまいます。

創立期の学校生活のようすは、小野先生や鈴木先生がくわしく書いて下さいましたので、私は、本校で最初に教えた子どもたちとの心のふれ合いについて、思い出すままに書くことにしました。

昭和三十二年四月、千葉の田舎から上京して、はじめて担任をしたのは、当時四年生であった一期生の男子でした。クラスの人数は四十九名の大世帯でしたからその賑やかなことといったらありません。

当時、本校には、白井先生(男の講師で体育を指導)がいましたが、男の担任は私がはじめてだったので、子どもたちからは、期待された存在であったことだけは確かです。

始業式がすんで担任が紹介され、やがて四十九名が待つ教室に入った時の第一印象は、「実に大きな声で話すクラスだ。」の二言につきました。あとでわかったことですが、本校では、ダルフィオール神父様が音楽授業で、ベルカント式の発声指導をされていたのでした。音楽の時間はともかく、普段話をするのもベルカント式ですからたまったものではありません。歌も上手ならおしゃべりも上手ときています。

私の方も負けず劣らず大声をはり上げたので、最初の日で声がつぶれてしまいました。底ぬけに明るい子どもたち、休み時間になると汗びっしょりになって遊びまわっている姿は聖ドンボスコの子どもそのものでした。

一日の授業がすんで下校をする時には、必ず「ごきげんよう。」とあいさつをしていたことが、田舎者の私には、たいへん奇妙に感じられたものです。

その頃私は碑文谷に下宿をしていましたので、放課後や休日には、よく子どもたちといっしょに帰ったり遊んだりしました。

毎朝八時ごろになると、山口憲行君、峠浩君、富岡義孝君(トミ)、松田聖君(マッキン)などが下宿に迎えに来てくれました。日頃教室では怒ることが多かった私も、この時だけは、子どもたちと対等に語り合える場でありました。

塾や習い事に通う子どもたちがほとんどいなかった時代でしたし、学校の近くに住んでいた子が多かったこともあって、放課後や休日には、サレジオのグラウンドで夕方遅くなるまで野球をしたものです。その頃の仲間を何人かあげてみましょう。

・平町方面

逢沢達人(アイちゃん)、船出允(フナ)、島内隆行(シマ)、木村泰臣(ヤッチー)、

・本郷町・鷹番方面

斉藤哲也、小林哲郎(テッチヤン)、小野豊和(オノ)、樋泉史彦(ヒーコー)、八巻良和(ヤーコー)、川瀬光郎(カーボン)、金沢あつし諄(カナ)

・清水町・原町方面

五十嵐洋夫(卒業するまで塩入さんにあこがれていた男)、星野人史(最初にピンタをくれた子)、飯島健三郎(イーケノ)

以下省略

クラブ活動も学級の中で独自に作り、実に楽しくやっていました。中でも科学クラブは活発で、現在の第一理科室でカエルの解剖(この時は全員参加)や鉄道模型などを動かしたりしました。さて、この学級の友達の中の一人に、体の不自由な子どもがいたことは、当時の在校生でも覚えている方が多いと思います。私が担任をした頃は、いつも教室の最前列の席にいて、休み時間や体育のときなどは、ひとり取り残されていることが多かったのです。遊び時間に他の友だちといっしょに外へ出られたらどんなに楽しいだろう。ある日、私が彼を背負って三階から校庭に連れて行きました。やがて、これが日課となり、体の調子のよい日には、必ず彼の姿が校庭で見られるようになりました。やがて、子どもたちも関心をもつようになりました。とりわけ背が高く腕白者だったスタルノフスキ・ケナ君(ロシア人)などは、「先生、今日はぼくが連れて行ってあげるよ。」といって、さっさと彼を背負ってしまうのでした。

今まで、とかく自己中心であった学級の子どもたちに、友だちに対する思いやりの心が芽生えたことは、はじめて担任をして一番うれしいことでした。彼が病気で欠席をした時には、友だちが遊びに行きあげたり、学校の話をして聞かせたりしていたようです。

この美しい友情は、サレジオオ中学高校に進学をした多くの友だちによって続けられました。

サレジオオ高校に進学した彼は重い病気にかかり危篤寸前の状態になったことがありました。この時、家族の方は、友人の山下保夫君に連絡をしたところ、彼が一番にかげつけて助けの力をかしたということです。

輸血を必要とした彼のために、何人かの友だちやサレジオ中学校の尾方神父様などが積極的に献血にかかって出たおかげで、やがて奇跡的に快復をすることができました。

星学園小学校で芽生えた友情が、今日もなお続いているように聞いています。

彼が病気の時、ノートを見せて学校の勉強を教えた西岡雅彦君はじめたくさんの友だち。

卒業後も、彼のよき友となって励ましてきた作田忠司君たち。

あの日あの頃、共に学び友情を育ててくれたことを感謝せずにはられません。

【同窓会報、第5号・昭和60年11月1日発行・から転載】